

企画・セッション その他企画・各種会議

10月6日(木) 14:30～16:00 第12会場(アートホテル旭川 3F ボールルームII)

日本赤十字看護大学附属災害救護研究所 企画 災害救護の展望と災害救護研究所の役割 「日本赤十字社の災害救護活動を再考する」

温暖化に代表される環境変化に伴う地球規模での自然災害の多発や、新興感染症の全世界への急速な拡大に示されているように、災害救護体制の充実はグローバルな課題と認識されています。

このたび日本赤十字看護大学附属災害救護研究所は、赤十字を始め国内外の災害救護に関する知の集積と発信の場として設置されました。

この研究所の意義は、過去から災害救護の知を学び、未来に向けて新たな知を創造することにあります。

研究の成果として、未来に希望を与えるビジョンを示さなければなりません。持続可能な開発目標(SDGs)が示す、「誰一人取り残さない (leave no one behind)」災害救護の新たな展望を社会に発信し続けることが研究所の使命です。



「日本赤十字社の災害救護活動を再考する」 すべては被災者のために！を全うするために

日赤の災害救護は医療、それも急性期災害医療だけではありません。平成29年に改訂された救護業務をみると、従来の応急救護業務にこころのケアが追加され、さらに生活支援などの復旧・復興に関する業務や防災教育などの防災・減災に関する業務が追加されました。

日赤の持つリソースを再確認してみましょう。オール赤十字で対応する日赤災害救護活動にはどんなものがあるでしょうか。

現在、様々な領域で日赤災害救護を実践している仲間がいます。そして、これからの活動を模索している仲間がいます。コロナ禍と格闘する仲間たち、ウクライナ支援を行う仲間たち、ボランティアの支援活動をする仲間たち、新たな研修を組み立てている仲間たち、外部から日赤を眺めている仲間たちなどです。

また、過去の災害を忘れることなく、被災者たちに寄り添い続けることも赤十字ならではの姿です。

「花開蝶満枝 花謝蝶還稀 惟有旧巢燕 世人忘亦帰」

たとえ世間が忘れても、赤十字はあの日を忘れずにずっと寄り添っていききたい。

蝶ではなく燕でありたい。

こうした仲間たちの声に耳を傾けながら、日赤医学会総会の参加者一人一人が「私事」として赤十字救護活動を考える機会になればと考えます。